PDF issue: 2025-11-05

# 丹波立杭焼の文献

### 島田,清

(Citation)

兵庫地理,3:34-37

(Issue Date)

1954-12

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002204



## 丹波立杭焼の文献

### 島 田 満

円波は、蓄から窯業の盛なところであるが、中世以降、円波焼が起り、日本七大古家の一つとして、今に人々の注意を驀いている。

この頃の円汲壊は、多紀郡の小野原・上立杭・下立杭・釜屋・氷上郡の村森・稲畑・大路、・黒井・牛河内等、数ヶ所に分れ、日用稚器を築いていたようであるが、現在では殆ど廃滅し、僅かに立杭焼にゲーフが残っているに過ぎぬ。これには、いろいろな理由があったと考えられるが、どうしてこのようになったのか、或はどんな製品が残っているだろうか、窓の構造は?製造の過程は?或は製作者の租職、経営の方法は?等、表別の研究問題が横わっている。たまたま、文化財保護委員会に於て、「立杭窯」を繋形文化財に選定し、昭和二十八年度の事業として、その記録を作製することとなった。又これと時を同じくして、京都大学の人文科学研究所でも、社会・経済的な立場から、この窯業の実態を調査することとなった。そのため、十二月十三日より十五日まで、兩者の合同調査が行われ、翌年一月十一日より十三日に亘ってもヤニ町の合同調査が行われることになっている。私は、これら兩調金のは水・更に十二月二十二日より二十三日にかけて、N・H・Kの亀井プロデューサー、鈴木穏・アナウンサー、松村保三郎技術員と共に同地を訪れ、立杭窯業試験場の横溝政太郎場長、丹波陶器協同租合の大西平八郎理事長、市野利雄副理事長、清水寅市理事をまじえて、現地銀音を行った。(この放送は、二十六日午前八時十五分より三十分までのN・H・Kオニ放送に於て、「近畿雑記帳」という題のもとに行われた。)

こうして立杭窯ならびにその製品に対する関心と 興味は急速に高められ、その実態に対する調査が各種の立場から行われるようになったが、日本の窯業を検討し、その事業を推進する上から言って、又、日本の社会・経済事情を明瞭にする上から言って、更に、文化財の保存と活用を図る上から言って、このことは大変意義あることと考えられる。しかしながら、これには、順序として、過去に於ける立杭援研究の経過を明らかにして置く低野がある。長い丁史を持つている円投立抗境に対しては、深い関心を払って来た人も匿分あるし、断片的ながら書かれた文献も少くない。又、單行本として出されたものもいくらかある。しかし、それらは、まだまだ充分にまとめられておらず、研究を大成するのには程速い感を禁じ得ない。今間こうした研究が行われるのを複様に、出まればそうした方面へもオー歩を踏み出したいと思っているが、それには生ず、過去の文献と研究業績に目を通し、これを整理してかかおばならぬ。本稿は、そうした意味から作製されたものであって、立杭堤に関する文献できる限り枚集り、これを表示したものである。そしい私が、短期向のうちに行つたこのできる限り枚集り、これを表示したものに放って、判されるところであるが、オニ、オミと訂補を加えて、次オに完全なものには上げたいと考えているので、完業諸覧の方にも、そうした意味から、御気付のことを御数示したがわれば幸甚である。

立杭炮に関して記述した文献を掲げるに当って、私は、大きく四っに大別してみた。一つは、地誌乃至は史書の類、一つは陶器ならびに茶道に関する書物、それから、窯業に関するもので、従来、書かれたものは、大体、この三っに分けられるのではないかと思う。しかし、入向の仕事は、そう機械的に分化してばかり行われないので、時には、どれにも関係あるもの、どれにもはつきり所属さど難いものもある。そういうものは、別に「總記」の部をつくり、そこへ入れて置いた。しかし、こうした分類は、便宜的なものであるから、いきほい、その所属について当を得ないと考えられるものがあるかも知れない。それらに、後日の訂補を俟ちたいと思う。

#### 一. 豫 記

1, 古事類苑

1 , 古			
2. 大百科爭與	2 7 ₩	平凡社	昭和7-9年
二、史 慧 関 係			
1. 大日本 地名辞書(元版)	5 ₩	吉田東伍	<b>州治33年</b>
2. 大日本地名辞書(新版)	7册	- 同	旧和   2 - 1 5 年
3. 大日本地誌(近義篇)	l <del>[11]</del>	佐藤・山墳	明治38年
4. 日本架内記(同)	2 <del>M</del>	博文館	
5. 日本地理大系	17冊	<b></b>	昭和4-6年
6. 日本地理風俗大系	19冊	新光社	リ 4-7年
7. 兵庫県 第土 池理	1 111	姫跲師範字校	〃 7年
8、矢庫県産業風土記	l <del>III</del>	兵庫県実業協会	ヶ  年
9. 兵庫県社会科読本	/ <del>III</del>	兵庫地理学協会	〃 24年
0, 私達の鄒土、兵庫県	1 <del>III</del>	兵庫県師乾字校	·, *
11. 兵庫県郷土蔵大系	1 ##	稻鬼收泊	〃 2.5年
12. 矢庫県郷土グラフ	4 #	北尾銀之助	25-26年
13. お国自虔	1 1111	· 兵庫県 世村会	〃 27年
14. 雄県矢庫	I ##	神戸新闻社	, 28年
15. 傑山對溫志	一冊	松骑雨冶	正億4年
16. 丹波志	37冊	古川茂正	寬敗 6年
17 丹波考	! ₩	小笠原利義	天保 9年
18. 史料通信義誌(円汲)	1 冊	近藤瓶城	明治26年
19. 丹可莨語	I <del>    </del>	更林負清	〃 30年
20. 獅土史料	3冊	山口加米之肋	∥ 33年
21. 多稅郡地誌	I ##	多紀郡教育会	《 4千年
22. 多紀酢誌	1 册	4	大正了年
23. 多紀鄉土史語	} <del>  M</del>	福原会下山人	昭和9年
24. 丹波史年表	l <del>M</del>	松井拳室	<b>《 12年</b>

36			
25. 今田鄉土史	1 ##	和中精选	四司28年(未定稿)
三、陶器、茶道 財 保		w	
I單行本			
1. 大正名暮艦	10册	高橋養雄	大正   2年
2. 大日本背董全書	1#	五春社	
3. 增補日本畫面骨臺大辞典	1 #1	池田富太郎	•
4. 陶磁器署	1 册	上田独美	昭和7年
5. 本朝陶器 放証	6 冊	金麻得水	
6.陶器全集	30册	小野貨一郎	
7. 陶器大辞典	6 冊	全 -	
8. 陶器講座	26冊	雄山阁	昭和10-12年
9.陶器図錄	12冊	仝	/ 13年
10. 日本名陶選	3 <del>II</del>	肠本果之軒	
11. 現代日本の民芸	1 #	式場隆三郎	
12、日本陶器全書	1 册 **	大西林五郎	昭和   5年
13. 日本古陶鉛款集	6冊	陶岩全集刊行会	″ 〃 丨 6 年
14. 丹波焼と仁溝	1 ##	福中又次	〃 17年
15. 茶道具	2 冊	高原 <b>養</b> 三 · · · ·	, 22年
. 16. 兼监抄	10冊	加藤養一郎	
.17. 郷工芸街名作展解説	1#	白鶴美術館	/ 25年
18. 丹波焼に就いて	1 #	横溝孜太郎	〃 26年
工 雅 誌			
1. 丹波の古窯に就て(上・下	)杉本捷雄	「茶わん」80~1号	四和12年
2. 丹波燒の発輸	井上吉次郎	全 80 号	4 . 4
3. 続丹波の古窯に就て	杉本捷雄	□ 茶わん191号	13年
4.古丹波の会	柳宗妃	「工芸」 898	" "
5. 丹波山の発色	井上吉次郎	仝	" "
6. 挿絵小註	柳泉胞	仝	2 4
7. 円波の茶陶について (上下	) 杉本東雄	Γ 煙もの廊味 J 51−2冊	* 14年
8.朝倉山散のことども	全	「茶わん」100号	4 4
9. またまた朝倉山椒	大村正夫	仝 101号	2 "
10. 建水談裏	佐々木三昧	「茶わん」105号	4 4.
11. 小野原燒余嚴	杉本捷雄	全	, ,
12. 丹波焼のこと	守田種夫	F 丹波民芸 1 1 号	4 9
13. 私の観た丹波焼(1・2)	曾原牛步	仝 1-2号	, ,
14. 丹波燒研究 (1·2)	守田種夫	仝 2-3号	" "
15. 丹浪焼の再検討	松升芋庵	全 2 3	* * .

16・釜屋古鬼阯のぐり	厌 史 生	「 丹液民芸」 2 等	昭和14年
17. 他窯に釣れ易口丹液	<b>杉本 捷雄</b>	「茶わん」 117号	· 15年
8.円波の傷剤	仝	仝 123 号	〃 16年
19. 百曾部燒異著	保田憲三	「古美鮓」  3の5	/ 1.8年
20. 近飯の民芸を語る	中村直勝舞	「日本美術工芸」39号	∥ 21年
21. 仁海の茶碗	一員田奥	全 61号	〃 23年
四. 駕 葉 良 保		•	
1. 日本近世窯業史			
2. 立 杭 焼	兵庫県工業部	【験場技術報告   15号	
3 立 机 紀行	田中東泊郎	F 丹 淑 民 芸 」 / 写	昭和14年
4. 立硫の窯業	高尾・横山	「産業餐剤研究」4の3	/ 26年
5. 立杭についてくりーチ集円	記念) 朽木〒	as as	〃 28年

以 上